

Letters Arpak

レターズアルパック

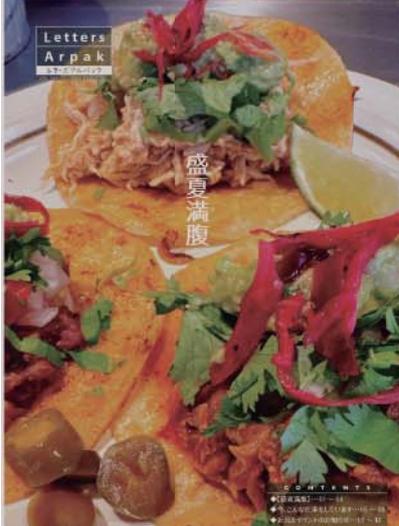
VOL.250 ISSN 2432-5295

はじまる、
はじめる

レターズ、レターズ。

環

はじ



CONTENTS

- ◆【レターズ、レターズ。】…01～02
- ◆アルパックの Ring!…03
- ◆今、こんな仕事をしています…04～05
- ◆近況&イベントのお知らせ…06
- ◆まちかど…裏表紙

アルパック・メディア考 レターが紡ぐアルパックの人財継承

三輪泰司：
名誉会長



レターズ、レターズ

Letters Arpak（以下レターズアルパック）は、この3月で250号を数えます。前身の「アルパック・ニュースレター」の創刊は1983年（昭和58年）7月1日、第17期でした。今年、アルパックは第58期になりますから41年前です。タイムリーにも、私達のメディアについて、この58年を振り返り、次なる持続へ向けて語る機会を与えて頂きました。

おどろきの「レター」

こんな「レター」を営々と送っているビジネスってあるでしょうか？中身は、借り物ではない、社員によるオリジナルな文章です。隔月刊発行なのですが、毎月きているように思っておられる方もおられます。

しかもこれ、国立国会図書館はじめ、図書館や大学へも送っています。ISSN（国際標準逐次刊行物番号）が与えられています（2432-5295）。

1991年（平成3年）の1月でしたか、当時の経済企画庁から「経済研究所ニュースレター」創刊の参考にしたいと依頼があり、OKしたのでした。そして、翌年7月発行号からISSNを付与しました。

「ARVOICE」GJAJ

アルパックの創業期は、全社員が参加して「土曜ミーティ

ング」をしていました。業務打合わせから研修会まで、全てのコミュニケーション機能を担っていました。「土曜ミーティング」では、こんなことがあった、こんなことを見つけた、と伝えあっていました。当時、名前は付いていなかったですが、「ニュースレター」のコラムの「まちかど」とか「知半解」欄の原型のような内容でした。社内「メディア」では、1992年春にアルパックの組織体制が新しくなり社内ニュース「ARVOICE」を創刊し、情報伝達記録全般を担うようになりました。ARVOICEは、毎月発行し、2000年（平成12年）7月82号まで紙媒体で、以降はメールでニュースを配信するようになりました。

「PLANET」GJAJ

1993年（平成5年）4月、金井萬造社長、PLANET創刊。第28期で社員91名、年商16億になっていました。「所内研究情報交流誌」と銘打っていましたが、第4号から「ひと・まち・地域をつなぐ技術情報交流誌」と改め、外へ出しはじめました。学位論文のベースになった研究報告、大学の現役教授や行政幹部の寄稿等々、社員の知的再生産のステージでした。PLANETは、2003年（平成15年）1月刊の12号で休刊になりました。

現在は、外向けには「Port Folio」「Annual report（アニエールレポート）」等、不定期に刊行しています。

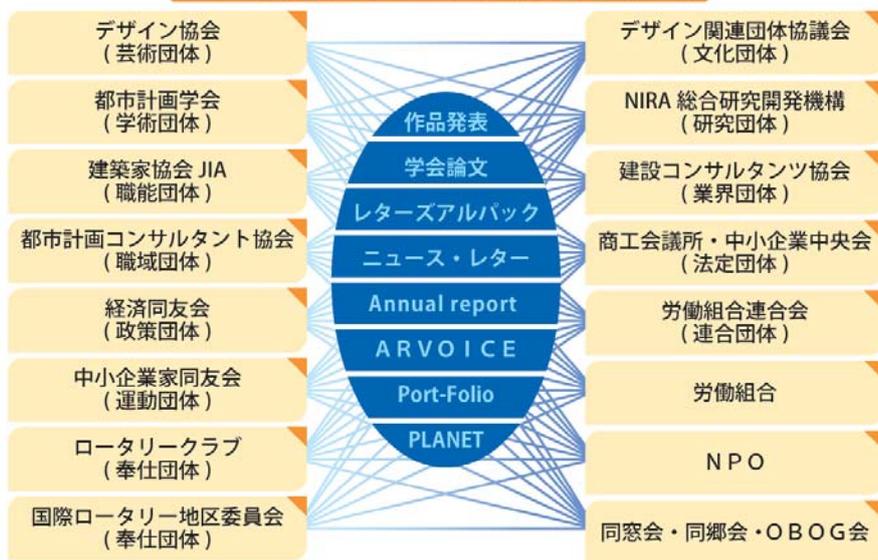
メディアの奮闘

メディアは、組織の盛衰にも関係します。PLANETがなくなつて2010年（平成22年）第45期には社員58名、年商9億に減少。営業利益ゼロ。2017年（平成29年）1月、第201号から「レターズアルパック」へリニューアル。翌2018年（平成30年）第53期には年商12億、利益率2パーセントにV字回復。或いは逆で、業績が下がり経費を節減したのでやめたのか？業績の数字は上がったが、パワーダウン。即ち、人財が去り持続への継承は停滞しているのでは……。

メディアの未来

創刊時には無かったITが発達しました。メディアの紙媒体はなくなるのではと思つていましたが、公文書でも立派に継承されています。重層化しているのです。人間のブレインワークに依拠しているアルパックのメディアは社員にとつても組織にとつても、ますます重要になるでしょう。個人としても組織としても「外」との繋がりによって生きてくるでしょう。個人でも組織でも、社会へ貢献する者が、社会的存在たりうるのでしょうか。

レターが紡ぐアルパックの重層ネットワーク



レターズアルパックに 込めた想い

中塚一：
代表取締役社長

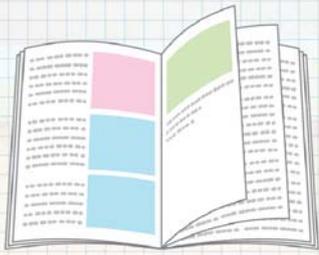
40年を越えて継続して発行しているレターズアルパックは、それぞれの時代の社会経済情勢や社会問題、アルパックが取り組んでいるプロジェクトの紹介、アルパック自身の新たな参画者の紹介や近況など、日頃所員が自分の頭で考えていることや試行錯誤している事をレターのよう短文で綴っています。所内誌からスタートし、1983年より所外向けに発行するため、所内で編集委員会を組織化し編集長も歴代所員が担っています。

当初より出来るだけ読者からのご意見をお聞きし、双方向で情報交換・発信ができればとの想いで編集してきています。特に私が編集長の時は、インターネットや各種SNSが広がって来て、マスメディアや紙媒体からWebを通じた人間での情報の発信や交換に大きくパラダイムシフトした時期でした。「そもそもレターズアルパックは必要なのか?」「その意義は何なのか?」と編集委員会でも様々な議論がありました。その後、表紙のデザインを白黒から一部カラー化に変えて少しでも手に取ってもらいやすくする事から始まり、全面カラー化と編集方針の変更、Webでのレターズ

発信などにチャレンジしていません。しかし、残念ながらもまだSNSのような気軽な双方向のコミュニケーションツールにまでは至っていない状況です。今後も読者の方々ととの関係性を構築し、「少しでも課題解決に役立つ情報やヒントを提供できているか?」、「読者の方々にだけでなく、自分達も含めてエンゲージメントやモチベーションが高まっているか?」など、常に試行錯誤する必要があります。

「企画書はラブレター」と言われるように、「レターズアルパック」も一方通行の情報発信ではなく、読者の心に届くかどうかを考慮しながら、今後も所員が積極的に執筆し、編集委員会がワクワクしながら編集し、スタイルや発信ツールは変化させつつも継続して発行していければと考えています。

今後ともレターズアルパックのご愛読をよろしくお祈り致します。



「レター」の250号を 振り返って

坂井信行：
レターズアルパック編集委員長

レターズアルパックは250号を迎えることができました。当初より奇数月の発行で、なんとか隔月に発行を続けてきました。これまでの変遷を辿ってみたいと思います。

・1983年7月0号(創刊記念号)、1983年9月に1号が発刊されています。タイトルの表記は「ARPA・K NEWS LETTER 地域計画・建築研究所」。この頃はモノクロですが、1983年11月の2号から表紙に写真が採用されました。

・1985年3月の9号から表紙のタイトルがアルパックのシンボルカラーであるブルーになりました。2色刷です。

・1989年5月の35号からタイトルの表記が「アルパック ニュースレター 地域計画・建築研究所」となりました。

・2000年5月の101号ではWebの開設と印刷のDTP化にあわせて紙面の公開をスタートしました。

・2005年7月の132号にはそれまでのB5版からA4版に変更しました。また、紙面をWeb公開時に「アルパックニュース」としてメール配信を開始しました。

・2010年7月の162号からは表紙と裏表紙がフルカラーになりました。

・2017年1月の201号からは全ページフルカラーの「レターズアルパック」となり現在に至っています。本号はレターズアルパックになってから50号目になります。

ARPA・K NEWS LETTERの時代からアルパックニュースを経て現在のレターズアルパックまで、変わらぬ編集方針は社員からみなさまへの「レター」であること。ビジネスの現場でも日常生活でも、近年はレターよりもメールが大部分でしょう。レターはいわゆる手紙、メールは郵便物全般を指すそうです。名称は変わっても、顔の見える「レター」という点を大切にしていきたいです。

昨今はメディアの多様化に加えて社員の意識の変化や世代による違いなどもあって、アルパック発の情報発信ツールとしてのあり方について、改めて議論すべき時期にきていると考えています。編集委員会でも引き続き議論を続けながら、次号以降には順次、新しい試みも検討していく予定ですのでご期待いただければと思います。

※創刊記念号から第250号までWebサイトでは全てお読みいただくことが可能です。左記からご覧ください。

<https://www.arpak.co.jp/lettersindex>

Ring!



「Ring!」は、アルパックの中のことをお伝えするコーナーです。アルパックと読者を「つなぐ」リング、情熱を見せる「土俵 (!?)」としてのリング、そして「ちょっと注目!」のリンリン! この「Ring!」からいろいろなアルパックを覗いてみてください。

「若手会議! よりよい情報発信を考える」

レターズアルパック 250号を機に、メディア委員会若手で、今後の情報発信について議論しました。

現時点におけるアルパックの主な情報発信媒体は、レターズアルパック、ホームページ、Instagramです。

情報過多な昨今において、情報を求める受け手に有益な情報をいかに届けることができるか、つまり、いかに我々の目的を達成できうるかが重要であり、アルパックの情報発信として、目的に沿った情報発信媒体の住み分けを検討しなければならぬと考えます。

本稿では、目的と情報発信媒体の特徴を整理し、目的に沿った情報発信媒体の使い分けイメージについて、少しご紹介いたします。

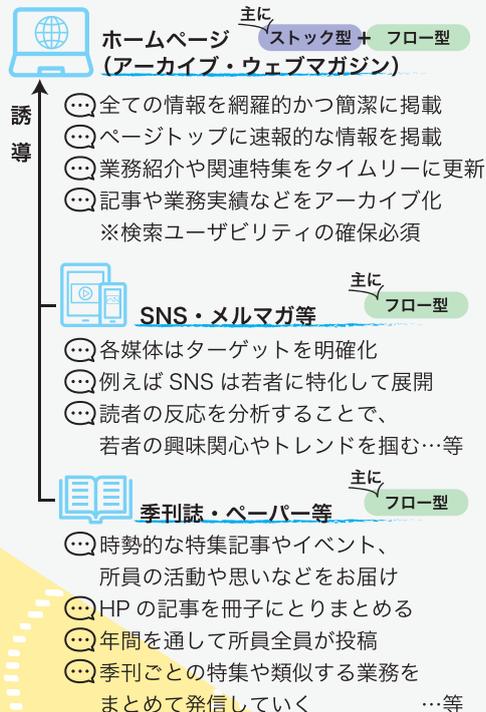
今後の情報発信媒体の住み分けとアイデアを整理すると、即時的な情報提供が可能であり、拡散力が高く、ストック型およびフロー型の両立が可能なホームページを主軸としつつ、印刷媒体やSNSで、ホームページの苦手領域を補完していくことが望ましいと考えます。また、各媒体の特徴を活かした複合的な情報発信で相乗効果を狙えます。特にホームページでは、これまでの情報発信に加えて、業務実績のアーカイブ化および検索のユーザビリティ確保が急務と考えます。また、今後のレターズアルパックの展開としては、誌面を充実させるとともに、これまで同様、所員の人となりが感じられる手作り感のある手紙としての継続した展開ができればと考えています。

アルパックの情報発信には、大きく3つの目的があると考えます。

- 情報発信の目的
- ① 営業
 - ② リクルート
 - ③ コミュニケーション

いずれも「アルパックを知ってもらう」が共通点。どんな会社か、どんな業務をしているか、所員がどのような思いを持っているかを知ってもらう。そして、私たちが皆さまのことを知りたいという思いがあります。どんな人が、アルパックの何に興味があるのか、何に期待しているのか、などなど。コミュニケーションとしての発信はまだ不足していると感じています。また、右記に整理したような媒体の特徴、発信手法の性質を上手に利用し、ターゲットと発信内容に応じて媒体、手法を使い分けることが重要です。

情報発信の展開イメージ (アイデア)



情報発信媒体の特徴

印刷媒体 (冊子、ペーパー等)

- 回読されやすい
- 信頼性・視認性が高い
- 記憶に残りやすい
- × コスト・労力がかかる
- × 拡散性・検索性が低い
- × 情報提供にタイムラグが生じる

インターネット媒体 (HP、SNS等)

- 即時的に情報発信できる
- 拡散力・自由度が高い
- コストが低い
- 読み手も即時的な反応が期待できる
- × 流動性が高く、情報が埋もれやすい
- × 検索されないと見られない
- × 利用者層に偏りがある

発信手法の性質

フロー型

トレンド性や速報性のある短期的な効果が見込まれるもの。例: SNS など

ストック型

発信した情報がアーカイブ的に利用される長期的な効果が見込まれるもの。例: ブログや Youtube など

Ring! /



読者とアルパックをつなぐリング!

よりよい情報発信には双方向のコミュニケーションが大事! ということで、みなさまの忌憚ないご意見をお待ちしております。当ページに記載の若手メディア委員が考える「よりよい情報発信」へのご意見、アイデア、レターズやアルパックへの思いなどをご自由にお聞かせください。

ご意見投稿フォーム
※所員も歓迎です!



プラットと貴生川 —駅前空間の市場性と社会性の検証—

宮英理子：

ソーシャル・イノベティブデザイングループ

滋賀県甲賀市で、昨年度の交流拠点施設の基本計画支援業務に引き続き、社会実験の支援業務を行っています。

対象となる貴生川駅は、3つの鉄道が乗り入れ、通勤や通学時には多くの人が利用する一方、日中の滞在者が少ないことが課題となっており、駅南口での交流拠点整備などが計画されています。

昨年度は、交流拠点の検討に向けた社会実験を約2か月間実施しました。今年度も11月8日から12月25日までの48日間、貴生川駅南口の広場で、社会実験「プラットと貴生川」を開催しました。今後、まちづくり会社を設立することも視野に入れ、「子育て世代」「若手社会人」「学生」をターゲットに設定し、テナント運営の収支といった「市場性」、運営者やテナント出店者の確保、滞在人口の増加といった「社会性」について検証しました。

社会実験の企画・運営は、貴生川エリアプラットフォーム内の「まちづくり会社準備会」が主体となり実施しました。広場にはトレーラーハウス2台を設置し、日替わりで飲食店や物販、マッサージなどのリ

ラクゼーション店舗が出店しました。他にも、キッチンカーなどのイベントを開催し、昨年度と比較して、約3倍の店舗・イベントが出店しました。トレーラーハウス内には机と椅子、図書コーナーを設置し、テナント出店がない際には、電車の待ち時間を利用して仕事をする方や、高校生が勉強する姿も見られました。

社会実験期間中には、ビッグデータ分析や、出店者・テナント・イベント利用者へのアンケートを実施。その結果、周辺道路の通過人口や歩行者量、広場の滞在人口の増加が確認されました。アンケートでは、市内の30〜50代の子育て世代の主な利用が見られ、イベント時には市外からの来訪者も増えていることが分かりました。一方で、出店者アンケートでは、収益性のあるテナントが飲食に偏っていることや、通過人口の増加が課題として挙げられました。

今後は、社会実験の結果を踏まえ、「まちづくり会社準備会」のメンバーと共に、まちづくり会社の設立に向けた検討を進めていきます。

「絵本のまち板橋」を周知するため、他業種の皆さんと連携したイベントを企画・運営しました！

筈谷友紀子：

ソーシャル・イノベティブデザイングループ

板橋区では、絵本のまち板橋のブランディングを推進しています。

アルバックでは今年度から板橋区の絵本に関する資源調査や、将来のユネスコ創造都市ネットワークへの加盟を目指した取り組みの検討を行っています。

その一環として、区民の皆さんに「絵本のまち板橋」を知ってもらおうとかけづくりとして、「みつめる・つながるくるくるパーク in ITABASHI」SDGsマルシェvol.2〜に「プチ絵本のまちひろば」ブースを作成し、親子連れのみなさんに楽しんでいただく仕掛けを検討しました。

プチ絵本のひろばでは絵本のまち板橋に関わる他業種の皆さんと連携した「顔はめ福笑い」の実施や、絵本のまち板橋事業を周知するパネル展示等を開催しました。他業種の皆さんと連携した「顔はめ福笑い」の製作過程は以下の通りです。



企画案検討のためのアイデア出し



顔はめ福笑い好きなパーツで自由に顔を作ります。

① 企画案検討のためのアイデア出し
クリエーター（株式会社10）、

大学講師（女子美術大学芸術学部アート・デザイン表現学科講師）、区内企業（リネット株式会社、無印良品板橋南町22）、出版社（ひかりのくに株式会社）、区内事業者（Cafe & Gallery Patina、TOKYO SOCIAL DESIGN）の皆さんにご参加いただき、アイデア出しを実施。

② 企画案の決定
皆さんからいただいたアイデアをもとに、株式会社10さんにイベント内容を企画していただき、「顔はめ福笑い」の実施が決定。

③ 制作物の作成
各種制作物については、顔はめパネルを区内の大江さん（株式会社善兵衛 篠原さん）とアーティストで看板屋の金子さん、顔パーツのマグネット

シール印刷をリネット株式会社と一緒に制作。当日は100組以上の方が顔はめ福笑いで写真撮影を楽しんでいただきました。

脱炭素と脱炭素「経営」の違いへの理解を全国に広める

畑中直樹：

サステナビリティマネジメントグループ

前号の江藤の記事で、豊田市やトヨタ紡織 Sunshine、兵庫県・神戸市での脱炭素経営に関するスクールの紹介しましたが、社会背景としてはサプライチェーン全体での排出量開示義務の動きが着実に進みつつあります。

国際的には、既にISSB（国際サステナビリティ基準審議会）の Scope3 の開示義務化（2023.6）、EU がリードする「Pathfinder Framework」[WBCSD（持続可能な開発のための世界経済人会議）のガイダンス] などがあり、日本においても、同基準をベースに民間のサステナビリティ基準委員会（SSBI）が日本版の基準策定（2025.3 予定）、2026年3月期の有価証券報告書から3月期企業の同基準に基づく開示が始まる予定です。さらに、削減貢献量（Avoided Emissions）についても、GHG プロトコルでの算定手法の検討も開始されています。

この間、宗像市や古賀市をはじめとした糟屋地域の自治体が共同で開催したセミナー（ほか九州経済産業局、省エネルギーセンター様など）や、龍谷大学サステナビリティ推進室主催の講座（ほか環境省、京都市環境部長様など）において基調講演と参加者を交えたフロアディスカッションのコーディネート



をさせていただいています。

これらでは、①単なる「脱炭素」ではなく、「脱炭素経営」を考える、②自らの力で脱炭素経営計画を組み立てるプロセスを大切に、③地域の企業がコミュニティとして結び付き共に支え合う、ことを常々お伝えしています。特に、地域経済循環の面から重要な地域に根差した中小企業の皆さんの「関わり」の大切さについては、皆さんに特に響いているようです。

冒頭のスクールでは、Scope3 の自主算定もスタートしています。地域の Sustainability 確保に向け、気候変動対策・脱炭素（環境）、地域の多様なステークホルダー間の関わり（社会）、地域経済循環（経済）のトリプルボトムラインの統合的解決に向け、引き続き貢献していきたいと考えています。

景観特派員、始動！南知多町の景観の魅力を住民がお届けします

筈谷友紀子：

ソーシャル・イノベティブデザイングループ

当社では南知多町の景観計画の策定支援を2年間にわたって実施させていただきました。

この景観計画の策定の中で、地域住民と連携した景観まちづくりの取り組みとして、「景観特派員」による景観の魅力発信活動を提案させていただきました。令和6年度からは景観計画の運用支援ということで「景観特派員講座」を実施しています。

限られた財政・人員の中で、景観まちづくりを進めていくにあたっては地域住民と連携するだけでなく担い手となっていた必要があります。

そこで、町内外の南知多町を愛する市民のみならず、「景観特派員」として南知多町の美しい風景を写真やレポートで発信していただく活動をスタートさせ



プロカメラマンによるカメラ講座



プロカメラマン：岩松晃一氏撮影

せました。今年度はプロカメラマンによる写真撮影講座とライティング講座を実施しました。撮影技術と文章技術を獲得した特派員のみならず、これからの発信活動が楽しみです。景観特派員による特派員レポートは3月の南知多町広報誌に掲載しています。ぜひご覧ください。



南知多町広報誌（b4-7 に掲載）

景観計画策定後の運用の課題・お困りごと

人員不足により届け出業務以外の取り組みまで手が回らない

予算の不足により計画で描いた施策の実行に至らない

開発ニーズも少なく、景観誘導が進まない中、成果が見えづらい

地域内外の市民が担い手として活躍

今後の施策展開の際の連携主体としての人材育成（施策の第一歩）

市民の景観の意識醸成とソフトの活動の創造を実現

「景観特派員」の取り組みを通してできること

名古屋

名古屋城下の生活を今に伝える遺跡

名古屋事務所 木下博貴

今日は、名古屋事務所が入居する名古屋国際センタービルの敷地内に残された遺跡についてご紹介します。

この遺跡「小鳥町遺跡」というのですが、国際センタービルを整備する際に敷地内から発見された切石護岸の溝の遺跡とのこと。この溝は、江戸時代の絵図にも描かれた生活排水路であり、溝底からは江戸期初頭から後期の陶磁器類が出土しています。ビルのある泥江地区一带は、戦災を逃れたため、江戸時代からの古

い木造建物が密集して残る地域でもあったため、名古屋市初の市街地再開発事業として国際センタービルは整備されましたが、そのビルの裏には、ひっそりと名古屋城下の生活を今に伝える遺跡が残されています。

名古屋事務所に来られた際には、一度ご覧いただければと思います。



適塾路地奥サロン報告

適塾路地奥サロン実行委員会

66回

2024年
12月6日

「デジタル技術を活用して『都市の理解』を広げる」

講師 広島大学大学院 教授 田中貴宏氏

第66回適塾路地奥サロンでは、広島大学大学院教授の田中貴宏氏をお招きし、「デジタル技術を活用して『都市の理解』を広げる—まちづくり支援を目的として—」というテーマでご講演いただきました。

講演では、まちづくりにおける複雑な課題に対し、デジタル技術がどのように活用できるかについて防災や環境、賑わい創出など様々な事例を通じてお話いただきました。特に印象的だったのは、食べログの評価データを使った都市特性の分析です。「札幌広福」の都

心部において飲食店評価データをプロットし、人気の飲食店が集まるエリアの特徴を明らかにするという試みでした。質疑応答では、「食べログの評価データの妥当性」について議論がありました。SNS分析は有効なインサイトを得られる一方で、バイアスやサンプルの偏りが存在するため、多角的なアプローチが必要だと感じました。

今回の講演を通じて、デジタル技術は都市の特性をより深く理解し、効果的なまちづくりを支援できる可能性があると感じました。講演で得た知見を活かし、今後のまちづくりにデジタル技術を効果的に取り入れ、持続可能で魅力的な都市づくりを目指していきたいと思えます。(城本大輝)

67回

2025年
2月21日

「名古屋駅裏から駅西へ—東海道新幹線とリニア新幹線をめぐる開発主義」

講師 名古屋市立大学 准教授 林浩一郎氏

第67回適塾路地奥サロンは、名古屋市立大学大学院人間文化研究科准教授である林浩一郎氏をお招きしました。今回の適塾路地奥サロンは初めて名古屋での開催となり、「名古屋ならではの話が聞きたい」と事務局で論文を検索し、リニア新幹線の開通に伴う名古屋のまちづくりの研究をされている林先生に話題提供をお願いしました。

林先生は、特に名古屋駅西エリアをフィールドに、都市の変化と住民の暮らしを生の声や写真資料から緻密に分析し、社会学の視点から社会の潮流に位置付け、これまでとこれからの駅西のまちづくりを分析・構想しようとする研究をされています。名古屋駅西は俗に言う駅裏と呼ばれる場所で、そのルーツは戦後の闇市に遡ります。東海道新幹線の開通に

より闇市は消え去りましたが、十数年前までは夜の店が立ち並び夜通しネオンの灯りが煌々と街を照らしているような場所でした。その風景が一変するきっかけになったのがリニア新幹線の開発工事です。まちからネオンが消え、まさにその場所にリニア新幹線の駅舎が建とうとしています。そのまちの変化に伴い、そこで暮らす人々の生活も劇的に変わろうとしている様子は実に興味深く、駅西エリアには今までほとんど縁がなかったのですが、まちづくりに関わるコンサルタントとして、名古屋駅西は目の離せない場所になっていると思えます。

会場には、論文共著者の木田先生、植田先生、駅西のまちづくり協議会のメンバーをはじめ名古屋駅周辺のまちづくりに関わってきた方々、再開発に関わるゼネコンの社員、名古屋の若手設計者や学生等が集まり、様々な視点から忌憚のない熱い議論が繰り広げられました。また名古屋で開催してほしい！との声もたくさんいただき、良い時間になったと思えます。(石橋昂大)



平日昼間に集える子どもの居場所（友人が立ち上げた場）

依藤光代

ソーシャル・イノベティブデザイングループ

ま
ち
か
ど

#オルタナティブな可能性

全国の小学校で、不登校児が増加している。不登校の理由は多様で、「ひと昔前よりも、『学校に行きたくない』という子どもの声が尊重されるようになった」という時代背景もありそうだ。

とはいえ、本人も社会での居場所感がなくなり苦しむこともあるし、親もなんとかしたいと悩む場合が多いだろう。そんなとき親は、いろんな場に向いて情報をやりとりし、学校外での子どもの居場所づくりや、学びの機会づくりのために活動する。私の住むまちでも、この小さな活動が芽生え、少しずつネットワーク化している。現行の学校教育の枠組みの「境界」部分では、深い葛藤と、そこからひねり出される活発な実践がある。

この実践のあり方は、松田素二（2021）による「集合的創造性」理論に通じると思う。キーになるのは、「個々の人間は不完全である」という前提と、「出会いなどの未知のインプットに開かれている」ということ、「互いの関係性の中で創造（問題への対処）をしていく」と想定されていること。「完全な」一人の主体を前提としている「西洋的な」価値観とは別の、オルタナティブな創造性についての理論である。一人ではできないからこそ、他者と出合い情報や人脈を持ち寄り、手探りでも粘り強く実践していくあり方である。

ほかに、枠組みの「境界」付近での取組みの例として、「障害者雇用」や「インクルーシブ雇用」（障害者手帳がない人対象の雇用）がある。「障がい」と一言で言っても全く多様で、その人のその日の事情を考慮した、「やれる仕事（とその量）」の割り振りがポイントになる。そのため、周りの同僚がその人の様子を見て声をかけ、できる仕事を分担しようとする姿勢が、就労継続のために大切になる。

障害者雇用の現場の様子を見聞きして思うのは、いわゆる「健常者」と呼ばれる、その他大勢の「普通の人」でも、職場で互いに配慮を

し合う方が働きやすいだろう、ということ。子育てをしながら働いても、子どもの体調によってこなせる仕事量には波がある。誰でも年齢を重ねれば体力も自然と落ちていく。障害者雇用の現場を支援する福祉関係者が言うには「障がい者への『個別の』配慮が職場で『当たり前』になり、互いを思いやるのが職場で自然とできるようになったとき、福祉の役割がなくなる。それが理想」。現在の狭い「健常者」普通」の枠組みからこぼれてしまっている人たちに環境と心を開き、その人たちを含める形で互いに気に掛けながら職場でチームプレーができるとき、誰もが働きやすいと感じられ、「障害者雇用」という枠組みすら不要になる。そんな可能性を期待し、また予感している。

では、どのようにその可能性を引き寄せていくことができるだろう？ 自分の思い込みをいったん外して、一人ひとりがオルタナティブを想像することが大事だと思う。プレイデイみかこ（2021）は、自分とは異なる他者の状況を想像する能力を「エンパシー」と整理し、それは「他者の靴を履く」ようなものだと言っている。

私たちもまずは、身近にいる職場の人や親せきの人、子ども・孫の同級生、隣の住民などに関心を持って、その人たちの靴を履いてみるどころからスタートしよう。

松田素二（2021）・集合的創造性ーコンヴィヴィアルな人問学のために・世界思想社
プレイデイみかこ（2021）・他者の靴を履く
アナークック・エンパシーのすすめ・文藝春秋

表紙写真：レターズアルパックバックナンバーより

「レターズアルパック」は、ホームページからご覧いただけます。

アルパック(株)地域計画建築研究所

Architects, Regional Planners & Associates, Kyoto
https://www.arpak.co.jp E-mail:info@arpak.co.jp

本社・京都事務所	〒600-8006 京都市下京区四条通柳馬場西入立売中之町99 四条SETビル2F	TEL(075)221-5132	FAX(075)256-1764
大阪事務所	〒541-0042 大阪市中央区今橋3-1-7 日本生命今橋ビル10F	TEL(06)6205-3600	FAX(06)6205-3601
名古屋事務所	〒450-0001 名古屋市中村区那古野1-47-1 名古屋国際センタービル7F	TEL(052)462-1030	FAX(052)462-1061
東京事務所	〒101-0032 東京都千代田区岩本町3-1-9 NOVEL WORK Iwamotocho 5F	TEL(03)5244-5132	FAX(03)5244-5140
九州事務所	〒810-0802 (株)よかネット：福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パールビル8F	TEL(092)283-2121	FAX(092)283-2128
滋賀営業所	〒527-0012 東近江市八日市本町9-19 SATSUKI-RO 内	TEL(090)1422-1096	

再エネ100宣言
とRE Actionこの用紙は「びわ湖の森を元気にする」
kikitopaperを使用しています。